

宿木卷の藤花宴

——帝王催の意義——

はじめに

『源氏物語』において、藤花宴は花宴卷、藤裏葉卷、宿木卷と正編・続編にわたって繰り返し描かれる。花宴卷では右大臣邸、藤裏葉卷では内大臣邸と、正編の藤花宴が藤原氏の實力者の自邸で私的に行われているのに対し、宿木卷の藤花宴は「公事にて、主の宮の仕うまつりたまふにはあらず」(宿木⑤四八一頁)とあるように、今上帝が主催する。「主の宮」とは今上帝皇女女二宮(母は藤壺女御)のことで、母を亡くした後、今上帝裁可のもと、すでに薫に降嫁している。女二宮の裳着の日に行われた婚礼の儀自体が、「大将参りたまひける夜のことは忍びたるさまなり」(同⑤四七四頁)と語られ、三日夜の儀は「私事」(同⑤四七六頁)とし

宮内理伽

て密やかに敢行されたのに対し、藤花宴は女二宮が薫と女三宮の住む三条宮へと移る前日に、女二宮の居所藤壺で夕霧、紅梅大納言などの公卿や匂宮などの親王たちが列した上で盛大に行われた⁽¹⁾。薫は「御婚」(同⑤四八三頁)として今上帝に手厚くもてなされ、その卓越した栄達が印象づけられている。

花宴卷の藤花宴には光源氏が、藤裏葉卷の藤花宴には夕霧が、それぞれ藤原氏の邸宅に招かれたが、(藤)に藤原氏の娘が仮託され和歌が詠まれていることから、招待した藤原氏側には光源氏や夕霧を婿に迎えたいという思惑があったようである⁽²⁾。すでに拙稿で、『伊勢物語』や『源氏物語』で行われた、物語世界の中の藤花宴と、宿木卷の藤花宴の関わりについて論じた通り⁽³⁾、物語世界の中の藤花宴は全

て臣下の邸宅で私的に行われた宴であり、天皇主催の公的な行事として藤花宴を宮中で行う例は見られない。また、観賞される対象の〈藤〉は、正編の藤花宴では藤原氏を象徴する景物として物語に登場しているが、宿木巻では藤壺に咲く花になっている。『源氏物語』の中の三度の藤花宴は連関しつつも、宿木巻の藤花宴のみ先行する二つの藤花宴とは全く異なる性質を持っている。

本稿では、宿木巻の藤花宴が天皇が主催した藤花宴であったことに注目する。第一節において史上の天皇主催の藤花宴の政治的背景と意義について検討し、第二節で藤花宴における藤原氏のあり方を論じた上で、第三節で続編での藤壺の変質について検討する。

一、天皇主催の藤花宴の意義

まず、宿木巻の藤花宴の叙述を確認したい。『花鳥余情』が天曆三年(949)に村上天皇出御のもと行われた藤花宴を准拠として指摘したことは広く知られている。

A 明日とての日、藤壺に上渡らせたまひて、藤の花の宴せさせたまふ。南の廂の御簾あげて、椅子立てたり。

B 公事にて、主の宮の仕うまつりたまふにはあらず、上達部、殿上人の饗など内蔵寮より仕うまつれり。C

右大臣、按察大納言、藤中納言、左兵衛督、親王たちは三の宮、常陸の宮などさぶらひたまふ。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり。D 後涼殿の東に、楽所の人々召して、暮れゆくほどに、双調に吹きて。上の御遊びに、宮の御方より御琴ども、笛など出ださせたまへば、大臣をはじめたてまつりて、御前にとりつつまゐりたまふ。E 故六条院の御手づから書きたまひて、入道の宮に奉らせたまひし琴の譜二卷、五葉の

枝につけたるを、大臣取りたまひて奏したまふ。次々に、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院の物どもなりけり。F 笛は、かの夢に伝へし、いにしへの形見のを、またなきものの音なりとめでさせたまひければ、このをりのきよらより、または、いつかははええしきついでのであらむと思して、取う出でたまへるなめり。G 大臣和琴、三の宮琵琶など、とりどりに賜ふ。大将の御笛は、今日ぞ世になき音の限りは吹きたてたまひける。殿上人の中にも、唱歌につきなからぬどもは召し出でて、おもしろく遊ぶ。(宿木⑤四八一―二頁)

引用したように、設営から酒宴まで詳細に儀式の様子が描かれている。藤壺の南側の廂の御簾を上げ、今上帝の椅子が設置された(A)。天皇主催の公的な行事として、内

藏寮が饗を手配し（B）、公卿や親王達も列した。南の庭に殿上人の座が設けられた（C）。楽人を召して管弦があったが、楽器は女二宮方から提供された（D）。さらに、光源氏親筆の琴譜が右大臣夕霧によって献上され（E）、その後朱雀院伝来の楽器も献上されたが、薫は柏木から受け継いだ横笛を吹いた（F）。この後、女二宮からの粉熟の提供や和歌の唱和があり、夜まで遊宴が続いたという。場所や殿上人の座の位置、楽人を召した上での管弦など『源氏物語』での藤花宴の叙述が、『西宮記』に載る天曆三年（949）の藤花宴の次第に沿ったものであることはすでに指摘されている。⁴『花鳥余情』以来天曆三年の藤花宴を准拠とする理由は、琴譜の献上に求められる。

西宮記云天曆三年四月十二日於飛香舍有藤花宴…大臣奏聞召_二樂所別当中納言源朝臣_一令召_二樂人_一…大臣取_二御杖_一源朝臣取_二御琴譜_一進_二御前_一奏云延喜御時御琴譜云…
〔花鳥余情〕宿木卷

醍醐天皇から娘勤子内親王へと伝えられた琴譜を、内親王の夫右大臣藤原師輔が源高明をして村上天皇に献上させている（傍線部）。この記述と対応するように、『源氏物語』では、女三宮に伝えられた光源氏親筆の琴譜を、夕霧が今上帝に献上している（傍線部E）。

先行研究では、主にこの天曆三年の藤花宴が重視されてきた。藤本勝義氏は、醍醐天皇の三人の内親王を娶った右大臣藤原師輔に関わる儀礼を准拠とすることで、薫が今上帝の婿として位置づけられたと論じた。⁵一方で、准拠が村上聖代の故実の史実であることに注目したのが中嶋朋恵氏である。氏は、盛大な儀礼が結婚披露の場となることで、薫がもはや自らの出生の秘密の露見を心配する必要がない立場へと昇ったと論じた。⁶

本節では天曆三年の藤花宴だけではなく、天皇主催の藤花宴という場そのものを『源氏物語』へと組み込んだ意義について注目したい。史上、父帝裁可のもと内親王が降嫁する事例は『源氏物語』が成立した後しか見られず、物語成立当時は内親王と臣下の婚姻を祝すような儀礼は存在していなかったと考えられる。内親王と臣下という物語世界独自の婚姻を祝す場として、何故天皇主催の藤花宴が仮構されたのだろうか。

この問題を考えるためには、天皇主催の藤花宴がどのような場であったのか確認する必要がある。⁸そもそも藤花宴は、花宴（主に桜を觀賞する）の一種として開催されていた。花宴の初例は嵯峨朝弘仁三年（812）二月十二日と言われているが、淳和朝以降正月に行う内宴に統合された。し

かし、宇多天皇が花宴を復活させる。宇多朝以後に行われた花宴は、常寧殿や清涼殿などの天皇の居所に近い空間で行われ、文人を召して漢詩を賦させるのを通例としたようだが、このことから滝川幸司氏は、「花宴は、内宴に似た天皇の私の宴・密宴という性格を持つ〈公宴〉ということができよう」と指摘している。⁽⁹⁾醍醐・朱雀・村上朝に隆盛を迎えた花宴だったが、村上天皇以降は次第に行われなくなっていた。

以下掲出するのは、儀式次第や史書に残る一条朝までの藤花宴の例である。⁽¹⁰⁾概観すると、藤花宴は多く後宮で行われている⁽¹⁾、⁽³⁾、⁽⁵⁾。

- ① 醍醐天皇 延喜二年(902) 三月二十日 藤壺
- ② 朱雀天皇 承平三年(933) 四月十七日 藤壺
- ③ 村上天皇 天曆三年(949) 四月十二日 藤壺
- ④ 村上天皇 応和元年(961) 閏三月十一日 冷泉院鈞殿
- ⑤ 円融天皇 天禄三年(972) 三月二五日 梨壺(一)

説に藤壺)

藤花宴とその他の花宴の違いについて、橋本不美男氏は大きく二点指摘する。⁽¹¹⁾一つ目は、天皇の居所に近い空間で行われた花宴の中でも、特に藤花宴は後宮で行われるこ

とが多く、その場合は后妃や皇女の列席を伴った点である。この点について、橋本氏は、藤花宴の出席者に注目し、藤原氏出身の「筆頭女御」と言うべき后妃が中心になっていることから、「撰関等の後見勢力による、後宮における正妃またはそれに準ずべき身位の実事上の顕示も意味しているのではなからうか」と示唆する。二つ目は、通例漢詩を賦す花宴に対し、藤花宴では和歌が詠進される点である。以下、藤花宴の場所や出席者、和歌の詠進に着目しながら、藤花宴の歴史の変遷とその意義を考える。

記録上に残る藤花宴の初例は、延喜二年(902)三月二十日の醍醐天皇の藤花宴である。

延喜二年三月廿日御記曰此日左大臣(藤原時平)於飛香舍藤花下有^ニ献物事^一左大臣執^ニ献物^一…而後列坐藤花下盃酒数^ニ巡^{シテ}後左大臣殊仰右大将(藤原定国)令^レ献^ニ題目^一飛香舍藤花和歌則左大臣置^ニ御硯匣奉手跡匣^一暫^{シテ}献^ニ横笛和琴^一其横笛箱是承和逢物^一耳酒盃

同「真本四」

〔河海抄〕宿木卷所引「延喜御記」

この日はまず、左大臣藤原時平が醍醐天皇に対し献物を行った。献杯の後時平は右大将藤原定国に和歌の題を献上させる。その後、手跡の匣、横笛、和琴なども献上された。注目すべきは、「飛香舍藤花和歌」という記述である。この

時初めて〈公宴〉において和歌が詠進されたことから、延喜二年(902)の藤花宴は和歌の公的な地位の獲得の場となつたとされ、『古今和歌集』編纂に影響を与えたと考えられてきた。¹⁵⁾

和歌との関連が指摘されると同時に、藤花宴開催の前年にあたる延喜元年(901)に女御宣下を受けた藤原穩子の存在もまた問題となる。田中喜美春氏は延喜二年の藤花宴を「時平の同母妹穩子の入内一周年を期して、その地位を確実にするために企画された、史上初の藤花宴」と位置付けている。¹⁶⁾ この藤花宴が穩子の入内一周年を祝しているかについては確証がないものの、多くの論において穩子と藤花宴の関連は認められている。

藤原穩子の入内をめぐって、宇多上皇・宇多上皇后后班子女王と藤原時平との間で対立があったことは広く知られている。寛平九年(897)七月三日に元服した醍醐天皇は同日践祚し、わずか十三歳で天皇となった。同時に宇多上皇同母妹為子内親王が醍醐天皇のもとへと入内したが(『日本紀略』)、この時実は穩子の入内も検討されていたことが『九曆』天曆四年(950)六月十五日条(逸文)に残っている。¹⁷⁾ 『九曆』によれば、班子女王が穩子の入内に強く反発し、宇多上皇が穩子の入内を止めさせたという。河内祥輔氏は、

阿衡事件の教訓から藤原北家が力を持つことを警戒した宇多上皇が、為子内親王所生の皇子を次の天皇に立てること(藤原北家を外祖父とする天皇の誕生を防ごうとする意図)があつたことを指摘する。¹⁸⁾ しかし、二年後の昌泰二年(899)、為子内親王は薨去してしまふ。穩子は、延喜元年(901)菅原道真左遷のわずか二か月後に、女御宣下を受けた(『日本紀略』)。藤花宴開催の前年に藤原時平は宇多上皇の反対を押し切り、穩子の女御宣下を断行したが、当然醍醐天皇も了解した上での女御宣下である。藤原北家が権勢を握ることを警戒した宇多上皇に対し、穩子という后妃を通して醍醐天皇は藤原北家に接近している。後宮において初めて催された藤花宴は、藤原北家との姻戚関係を背景に行われたと見るのが妥当なのではないだろうか。

朱雀朝承平三年(933)に行われた¹⁹⁾の藤花宴に関して、『日本紀略』にわずかに、「天皇召²⁰⁾公卿侍臣於飛香舍²¹⁾。飢²²⁾藤花²³⁾。命²⁴⁾絲竹²⁵⁾。賦²⁶⁾詩。」(『日本紀略』承平三年四月十七日条)と残る。この頃藤壺を居所としていたのは、朱雀天皇母后藤原穩子だった。²⁷⁾ この時朱雀天皇はわずか十歳。朱雀天皇御代において穩子は母后として絶大な影響力を持つっており、藤壺で行われた藤花宴に穩子が関与した可能性は高い。朱雀天皇が藤壺で藤花宴を行うことで、母后穩子の後

〔宮居所に公卿達が参集したと見られるが、そこに参加した者達は天皇の後見役を担う藤原穩子の影響力の大きさを認識しただろう。〕

先述したように、村上天皇臨御のもと天曆三年(949)に行われた③の例は、『花鳥余情』以来、『源氏物語』宿木巻藤花宴の准拠として知られている。この時、藤壺を居所としていたのは右大臣藤原師輔の娘安子だった。⁽¹⁸⁾③の藤花宴の参加者については、『古今著聞集』から伺い知ることができさる。

同じき三年四月十二日、飛香舎にて藤花の宴ありけり。

右大臣(藤原師輔)・左衛門督(源高明)・左兵衛督(藤原師尹) 候ひ給ふ。和歌糸竹の興などはてて、女御(藤原安子)、御おくり物ありけり。先皇の勤子内親王にたまひける箏譜三卷、貞保親王の用るたりける笛・螺鈿の筥などをぞ奉り給ける。…

(卷第六管弦歌舞・二三九)

右大臣藤原師輔、左衛門督源高明、左兵衛督藤原師尹、村上天皇女御で藤原師輔の娘藤原安子が参加している。⁽¹⁹⁾源高明は藤原師輔の娘婿、師尹は師輔の同母弟であり、藤原師輔・安子親子と血縁・姻戚関係が濃い公卿が参加していると思われる。

天慶三年(940)四月に、安子は立坊前の村上天皇のもとへいち早く入内した。村上天皇は天慶七年(944)四月二十日に立太子、天慶九年(946)四月二十日に踐祚(『日本紀略』)。五月に安子は女御宣下を受けている(『眞信公記』)。師輔異母兄藤原実頼は、その年の十一月に娘述子を村上天皇のもとへと入内させた(『眞信公記』)。述子は翌月すぐに女御宣下を受け、村上天皇の有力な后妃の一人として後宮内の情勢に影響を与えたが、入内した翌年の天暦元年(947)十月五日に産褥で薨去する(『日本紀略』)。③の藤花宴はその二年後の天暦三年(949)、村上天皇が安子の居所藤壺で開催した。

村上天皇が藤壺で藤花宴を開催するということは、藤原師輔・安子やその一門と場を共有することであり、その場で両者は安子と村上天皇の姻戚関係を中心に連帯していくことを確認したのではないだろうか。橋本不美男氏はこの藤花宴について「右大臣師輔の宴における役割からして、安子のために、安子を後見しての藤花宴であることは、容易に推定できる」と指摘している。①の藤花宴が穩子や時平との強い連帯の中で行われたことを考えれば、この藤花宴でも藤原北家との強い連帯は対外的に示されたと考えられる。

そしてそこに通例常寧殿や清涼殿で行う花宴をあえて後宮空間で開催する意義があるのではないだろうか。藤壺で行うことで、天皇と后妃とその一門が場を共有し、姻戚関係を確認することで、強固な紐帯を結ぶことができた。①においては醍醐天皇と女御藤原穩子、その同母兄時平、②においては幼帝朱雀天皇と母后藤原穩子、③においては村上天皇と女御藤原安子とその父藤原師輔が中心になっており、彼らを頂点として後宮の秩序が出来上がりつつあることを示しているのである。藤花宴という宴は藤原北家と天皇との姻戚関係を確認する場であり、その強固な紐帯を対外的に示していく役割を担ったと考えられる。

④・⑤は藤壺以外での藤花宴の例になる。④応和元年(961)に村上天皇主催のもと冷泉院で行われた藤花宴は、『日本紀略』、『花鳥余情』、『扶桑略記』に記録が残る。

閏三月十一日、於_二釣殿_一有_二藤花宴_一。龍頭鶴首舟各一艘。有_二童舞等_一。閏白左大臣実頼朝臣_レ彈_レ箏。大納言源朝臣高明_レ彈_レ琵琶。雅信朝臣吹_レ笙。朝忠朝臣吹_レ笛。以_二御衣_一各賜_二公卿_一。

〔扶桑略記〕 応和元年閏三月十一日条

『扶桑略記』によれば、釣殿で行われた藤花宴には左大臣藤原実頼、大納言源高明、源雅信、藤原朝忠などの公卿

が参加した。後宮空間で開催されておらず、后妃や皇女の臨席は見られないが、⑤天禄三年(972) 円融天皇主催のもと梨壺(一説では藤壺)で行われた藤花宴では、円融天皇同母姉資子内親王が参加した。『日本紀略』にのみ記録が残っているが、「資子内親王於_二昭陽殿_一有_二藤花宴_一。天皇臨御。宴訖。内親王叙_レ一品。」(『日本紀略』天禄三年三月二十五日条)とある通り、この藤花宴で資子内親王は一品に叙されている。資子内親王は円融天皇の母后の代りを担ったことが知られており、同年十二月に准三宮とされた(『日本紀略』『親信卿記』)。藤壺以外の場で藤花宴を行う場合においても、後宮空間で行われた場合には、皇女を中心として藤花宴が開催されているのである。

以上、史上の天皇主催の藤花宴の意義について見てきた。天皇の居所近くで行われ、漢詩を賦した花宴と異なり、藤花宴は藤原氏出身の後妃の後宮居所で行われ、和歌が進上された。藤花宴には后妃の一門も参集しており、天皇と同じ場を共有することで、藤原北家と天皇の連帯を確認する場であり、対外的に示していく役割も担ったようである。

ここで『源氏物語』を振り返って見ると、今上帝と薫の姻戚関係は以下のように描かれていた。

I 「女子うしろめたげなる世の末にて、帝だに婿_レ求め

たまふ世に、まして、ただ人の盛り過ぎんもあいなし」
など、そしらはしげにのたまひて、：

(宿木⑤三八〇頁)

Ⅱ帝の御婚になる人は、昔も今も多かれど、かく、盛りの御世に、ただ人のやうに婚とり急がせたまへるたぐひは少なくやありけん。

(同⑤四七五頁)

Ⅲ上臈の親王たち大臣などの賜りたまふだにめでたきことなるを、これは、まして、御婚にてもてはやされたとまつりたまへる、御おぼえおろかならずめづらしきに、：

(同⑤四八三頁)

Ⅳ(紅梅大納言)「人柄は、げに契りことなめれど、なぞ時の帝のごとしきまで婚かしづきたまふべき。またあらしかし。」

(同⑤四八三頁)

Ⅰは女二宮の降嫁が決定した直後の右大臣夕霧の批判、Ⅳ藤花宴の中での紅梅大納言の批判であるが、兩者ともに時の帝が臣下の立場にある者を「婚」として迎えることに強い反発を覚えている。また、語り手もⅡ・Ⅲにおいて時の帝の皇女が臣下に降嫁することの異例さを強調する。いずれの場合においても、女二宮の降嫁を薫が今上帝の「婚」となったと表現されている。『源氏物語』で描かれる内親王降嫁の中で唯一薫のみが「婚」として描かれることが指

摘されているが、宿木巻では女二宮が薫を「御婚」として迎え「婚」という用語が多用されることで、帝と薫の間に結ばれた姻戚関係が強調されている。

特に、ⅢとⅣは藤花宴の中での描写である。「公事」(宿木⑤四八一頁)として行われた藤花宴で、薫が「婚」として今上帝に手厚く歓待されることで、帝と薫が姻戚関係を結んだことが示されている。史上後宮で開催された藤花宴が天皇と后妃、その一門という三者の姻戚関係のもとに開催され、その紐帯を示す場であったことを考えれば、物語世界においては、天皇と娘と婚という三者の關係に変形されて、藤花宴が開催されているのではないか。薫を「婚」と繰り返し呼ぶことは、帝との姻戚関係を強調している。そして、藤花宴に参加した夕霧・紅梅大納言・匂宮・常陸宮などの公卿や親王達は、今上帝と薫の姻戚関係を中心とする新しい政治的秩序が生み出されつつあることを目の当たりにすることになった。紅梅大納言の強い批判(Ⅳ)は、藤花宴そのものへの強い抗議ということになるだろう。

物語成立当時には天皇裁可による内親王と臣下の婚姻は存在せず、今上帝の許しのもと女二宮の婚に薫が迎えられ、しかも帝が婚となった臣下のために宴を主催するなど非現実的なことであつただろう。そこで、女二宮の婚とい

う類稀れな栄進の道を進む薫を祝福する場として、史上天皇と后妃を中心に後宮において開催された藤花宴に准えた天皇主催の藤花宴を、物語は構想したのではないだろうか。宿木巻の藤花宴は今上帝と女二宮、そして薫と三者の連帯を示すために物語の中に組み込まれているのである。

二、藤花宴における薫と紅梅大納言

前節では、藤原北家と帝の連帯確認の場であった藤花宴を、『源氏物語』では薫を今上帝の婿に迎える場として設定していることを論じてきた。ここで改めて問題となるのが、薫が密かに継ぐ藤原氏嫡流の血脈の問題なのではないだろうか。今上帝は女二宮の降嫁を思案した際に、「朱雀院の姫宮を六条院に譲りきこえたまひしをりの定め」（宿木⑤三七六頁）と女三宮と光源氏の先例を思い出し、光源氏の息子であることを理由に薫への降嫁を決定した。しかし、実のところ薫は藤原氏嫡男柏木の息子であり、藤花宴の中では柏木から受け継いだ笛を「今日ぞ世になき音の限りは吹きたて」（同⑤四八二頁）る。物語はこの叙述を藤花宴の中に組み込むことで、薫は柏木の子であり、藤原氏嫡流の血を継ぐ存在であることを思い起こさせている。

そもそも薫の血脈という問題において、藤花宴で鑑賞さ

れる〈藤〉という景物が藤原氏に通じることとも見過ごすことは出来ない。先述した通り、『源氏物語』正編で描かれた藤原氏私邸での二つの藤花宴では〈藤〉は藤原氏を象徴していた。⁽²⁾宿木巻の藤花宴においては、〈藤〉に薫の破格の栄達を託して、和歌が詠まれている。

（薫）すべらきのかざしに折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり

うけぱりたるぞ、憎きや。

（帝）よろづ世をかけてにははん花なれば今日をもあかぬ色とこそみれ

（夕霧）君がため折れるかざしは紫の雲におとらぬ花のけしきか

（紅梅大納言）世のつねの色とも見えず雲居までたちのほりたる藤波の花

これやこの腹立つ大納言のなりけんと思ゆれ。

（同⑤四八四～五頁）

一首目は薫の和歌である。「藤の花」は女二宮を指しているが、二首目の「花」は女二宮ではなく薫を指す。三首目の「花のけしき」は女二宮と薫の婚姻を祝す。最後の四首目は波線部「腹立つ大納言」とあることから紅梅大納言の和歌であり、この歌には薫への嫉妬が込められていると

考えられる。一般的に今上帝の和歌と解される二首目の歌については『新古今和歌集』の醍醐天皇の和歌が、三首目の夕霧のものとされる和歌については『拾遺和歌集』の藤原国章の和歌がそれぞれ引き歌として指摘されている。

飛香舎にて、藤花宴待りけるに 延喜御歌

かくてこそ見まくほしけれ万代をかけてはほへる藤浪
の花 (春下・一六三)

延喜御時、藤壺の藤の花宴させ給ひけるに、殿
上のをのこどもうたつかうまつりけるに

皇太后宮権大夫国章

ふぢの花宮の内には紫のくもかとのみぞあやまたれけ
る (雑春・一〇六八)

この二つの和歌は醍醐天皇御代に行われた藤花宴で詠進されたと考えられている。橋本不美男氏は、醍醐天皇の和歌については「藤氏氏長者の娘女御とともに見る感慨」、国章の和歌については「藤氏・藤をからめた瑞雲の意」と解すべきと述べ、藤原北家の繁栄が祝福されているとする。『源氏物語』では、これらの和歌を引き歌にして帝・夕霧の詠歌が作られるのだが、薫が藤原氏嫡流の血を引くことと無関係ではないだろう。薫は女二宮の方を「藤」と喩えるが、他の詠者達は薫をも含みこんで「藤」に喩える。唱

和歌の中で薫が実は藤原氏嫡流の血脈を継いでいることが含意され、その栄達が祝福されている。

今上帝の婿という史上類を見ない栄華に浴した薫とは対照的に、不満を募らせているのが、柏木の同母弟で、故致仕大臣家を継いだ紅梅大納言である。唱和歌には「雲居までたちのほりたる藤波の花」と薫への嫉妬と羨望が込められ、その様子も「いみじく譏りつぶやき申したまひ」(宿木⑤四八四頁)、波線部「腹立つ大納言」などと語られる。しかし、薫の秘せられた系譜を辿れば、紅梅大納言は叔父に当たる。すでに薫は自らの出生の秘密を知っているが、紅梅大納言は知らない。ここに、柏木の長子という、藤原氏一門の長となるべき血を引く薫に対して、現当主が腹を立てるといふ、「一種の皮肉な、滑稽な構図」を見出すことができる。物語世界の中で常にくすぶつてきた薫の出生の問題が、藤花宴の中で藤原氏嫡流の系譜の問題として立ち現れているのだが、その背景には「腹立つ大納言」とや戯画的に描かれる紅梅大納言こそが、本来であれば藤原氏嫡流の実力者として帝と姻戚関係を結び、強く連帯していく立場にある人物であり、より踏み込んで言えば、帝王催の藤花宴の中心にいるべき人物であるということが関わっているのではないか。

もし仮に、史上藤壺で行われた藤花宴をそのまま物語の中に組み込んだのであれば、紅梅大納言の姉妹か娘が今上帝に入内した上で、紅梅大納言を筆頭とする藤原氏一門が参加して行われただろう。しかし、今上帝後宮に故致仕大臣家出身の後妃はいない。というのも、故致仕大臣は雲居の雁を今上帝（当時東宮）へ入内させることを検討したが、結局は夕霧を婿として迎えた（藤裏葉巻）。紅梅大納言自身も明石中宮の存在を理由に、今上帝への大君の入内を断念している（紅梅巻）。故致仕大臣家は今上帝後宮に娘を入内させることが出来なかったのである。宿木巻では、かつて藤壺女御を妻に望み、女二宮の降嫁が検討された際には女二宮の降嫁先として紅梅大納言が名乗りを上げていたことも語られる。紅梅大納言にとつて、今上帝と姻戚関係を結ぶ千載一遇の機会であっただろう。しかし、今上帝の婿に迎えられたのは、兄柏木の不義の子である薫だった。結果的に、藤原北家を中心となるべき藤花宴は、藤原氏嫡流の血を引きながら決して公にすることは出来ない薫を中心に開催されることになり、紅梅大納言は「さすがゆかしかりければ参りて」（宿木⑤四八四頁）とあるように、本人の好奇心に従って参加した、ただの参列者になった。「我こそかかる目も見んと思ひしか、ねたのわざや」（同⑤四八三頁）

という紅梅大納言の心内語は薫への単なる嫉妬ではない。その怒りの根源には、父親の代から受け継ぐ積年の恨みがあり、自分こそが藤原氏嫡流の当主として藤花宴の中心に在るべきだという意識が、強烈な嫉妬となって薫に向けられたのである。一方、薫は「このをりのきよらより、または、いつかははええしきついでのあらむと思して」（同⑤四八―二頁）、実父柏木の笛を吹く。薫は己の血脈を自覚した上で、藤原氏出身の臣下としてはこれ以上ないほどの栄進の道を進むことになったことを認めているのである。

ここで、藤花宴の献物に注目したい。第一節で掲出した①延喜二年（902）と③天曆三年（949）の藤花宴の中で献物が行われているが、献物とは臣下から天皇への財物献上儀礼のことである。①延喜二年の藤花宴では、藤原時平の献物の儀があり、その後手本・硯・横笛・和琴が献上された。③天曆三年の藤花宴では、藤原師輔によって醍醐天皇の琴譜、貞保親王の笛などが献上された。女御の近親者である、藤原北家の実力者が帝に対して献物を行っており、献物という行為そのものが君臣の私的な関係を改めて示している。しかし、宿木巻で今上帝に光源氏親筆の琴譜を献上するのは、右大臣夕霧である。今上帝にとつて夕霧は明

石中宮の異母兄であり、血縁を辿れば従兄弟にあたる。また、六条院家には異母姉妹落葉宮と女三宮が嫁している。夕霧の献物は今上帝の婿となった薫の近親者としての行為であり、同時に六条院家と今上帝の緊密な関係を象徴している。薫は六条院家の一員として藤花宴に臨んでおり、そこに紅梅大納言が入る余地はない。准拠を導く『源氏物語』の叙述こそが、紅梅大納言の政治的な排除を象徴しているのである。

物語は藤原氏嫡流の血を引きながら決して公言すること出来ない薫を藤花宴の中心に据えることで、藤原氏嫡流に生まれた者として家を支えてきた紅梅大納言を藤花宴の中心からは排除する。物語はあえて藤花宴を設定することで、皮肉にも薫の隠された血脈を明らかにしながら、紅梅大納言という藤原氏嫡流の当主を藤花宴の外縁、ひいては血縁・姻戚関係によって結ばれた帝と臣下の強い紐帯の外側に押しやってしまうのである。

三、藤壺と〈藤〉

天皇主催の藤花宴という場が、薫の隠された血脈や紅梅大納言の政治的な排除を明らかにしていることを確認してきた。最後に、正編の藤花宴において藤原氏を象徴してい

た〈藤〉という花が、後宮居所である藤壺の花になっ
て居ることについて考えたい。

宿木巻の冒頭の女二宮の登場は、若菜上巻冒頭を意識して描かれていると指摘されてきた。⁽²⁵⁾ 両者は、藤壺を居所としたこと、母女御が他の后妃に気圧され立后叶わず失意のまま薨去したこと、後には女宮が一人残されたことなど共通点が多い。同様の設定を以て、有力な後見がない皇女の結婚問題が語られることも、宿木巻と若菜巻の繋がりを強めている。従って、女二宮が藤壺を居所という設定は、若菜巻の女三宮とその母藤壺女御が藤壺を居所としていたことを踏まえていると考えられる。

そのころ、藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける、まだ春宮と聞こえさせし時、人よりさきに参りたまひにしかば、… (宿木⑤三七三頁)

物語の叙述から、梅枝巻で今上帝(当時東宮)に入内した「左大臣殿の三の君」(梅枝③四一四頁)の麗景殿女御が思い起こされる。⁽²⁶⁾ この女御は、続編ではわざわざ藤壺へと居所を移動しているようなのだが、この居所の設定には、正編の藤壺中宮まで重ね合わせようとする物語の意識が働いているとする見方がある。⁽²⁷⁾ 若菜巻の藤壺女御は藤壺中宮の異母妹であり、その血縁関係に光源氏は興味を掻き立

てられた。その若菜巻の物語に重ね合わされることで、宿木巻の女二宮降嫁は実現している。確かに、宿木巻の居所の設定は、物語内部の過去の作中人物を回想させることは間違いないだろう。

ただし、『源氏物語』正編において、藤壺を居所とするのは桐壺帝の藤壺中宮、朱雀帝の藤壺女御と、先帝の皇女たちであったことに注意する必要がある。藤壺中宮は「先帝の四の宮」（桐壺①四一頁）、「后腹の皇女、玉光りかかやきて」（花宴①三四八頁）などと先帝の後腹の皇女であることが物語の中で繰り返し描かれていた。藤壺女御の素性もまた「先帝の源氏」（若菜上④一七頁）と明確に描かれる。正編では藤壺という場所は、藤壺中宮が住む特別な居所というだけでなく、先帝の皇女たちが使う居所であった。

宿木巻の藤壺女御は、傍線部「故左大臣殿の女御」とある通り臣下の娘であり、皇統の血を継ぐ人物ではない。しかし、あえて『源氏物語』において特別な場所とも言うべき藤壺に居所を移動した。そこには若菜巻との関連に加えて、物語が女二宮と薫の結婚の披露の場として藤壺での藤花宴をあえて設定する必要性に迫られていたということも奇与しているのではないか。物語は内親王と臣下の結婚を祝す場として、史上の藤花宴に准えた藤壺での藤花宴を仮構

したのだが、女二宮の降嫁の物語の結末として藤壺での藤花宴が設定された時、その語り出しは当然「そのころ、藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける」（宿木⑤三七三頁）となるだろう。左大臣の娘が藤壺に居所を移動した時、正編において先帝の皇女の居所として造型された藤壺という特別な場所はその意義を失い、正編において藤原氏を象徴した〈藤〉の花は、藤壺に咲く花へと変わったのである。

女二宮が降嫁した後も、薫は六条院春の町に居所を持つ明石中宮腹の皇女女一宮への思慕を抱き続けている²⁸。その姿には実父柏木の影が垣間見えるが、柏木の造型には藤壺中宮を慕い続けた光源氏の姿が影響しているだろう。しかし、光源氏が藤壺中宮、柏木が女三宮と、藤壺を居所とする、先帝の血を受け継ぐ皇女を慕い続けた一方で、薫は藤壺を居所とする女二宮を娶りながら、六条院に住む女一宮を望む。続編では「いささか矮小化²⁹」された藤壺が、もはや物語にとっては特別な場所ではなくなってしまうために、薫は女二宮を娶りながらも、六条院に住む女一宮へと駆り立てられるのではないだろうか。

おわりに

『源氏物語』宿木卷の藤花宴は、天皇出御のもと公的な宴として開催された。ここには史上の天皇主催の藤花宴、特に藤壺で行われた場合では、藤原氏出身の后妃とその一門と天皇との姻戚関係を確認し、対外的に示す場であったことと大きく関係している。後宮に天皇が臨御し、天皇と姻戚関係を結んだ藤原北家が参加、献物や舞、管弦を行うことによって、天皇と藤原北家が強く連帯していくことが示されていた。『源氏物語』宿木卷では、史上の藤花宴を、天皇とその娘と婿という姻戚関係に置き換えて開催している。天皇裁可による内親王の婚姻がなかった時代に、皇女と臣下の結婚を描き出そうと試みられた結果であり、藤花宴によって今上帝と女二宮と薫という三者の姻戚関係は対外的に披露されることになった。物語は藤壺での藤花宴を薫栄達を象徴づける場としてあえて選んでいるのであるが、鑑賞される対象としての〈藤〉は、薫が密かに受け継ぐ藤原氏嫡流の血脈を含蓄している。その結果、正編では先帝の皇女の居所であった藤壺は、藤原氏の象徴としての〈藤〉に組み込まれた。物語にとって、皇統の血を引く女性の居所であった藤壺はその意味を失ってしまったのである。

【注】

- (1) 小町谷照彦「藤花の宴をめぐる」(『むらさき』第三十六輯、一九九九年十二月)
- (2) 倉田実「花宴」巻の宴をめぐる―右大臣と光源氏体制の幻想―(『国語と国文学』第六五巻第九号、一九八八年九月)
- (3) 宮内理伽「宿木卷での女二の宮の降嫁と藤花宴の意義について―「かしづく」をめぐる―」(『むらさき』第五十八輯、二〇二一年十二月)。「源氏物語」や先行する物語の中で描かれた藤花宴として、『伊勢物語』百一段在原行平邸での私宴、『うつほ物語』吹上上卷神奈備種松邸での私宴、『源氏物語』花宴巻右大臣邸での私宴、『源氏物語』藤裏葉巻内大臣邸での私宴がある。このうち拙稿においては、『伊勢物語』『源氏物語』を対象とした。
- (4) 中嶋朋恵「宿木卷の二つの結婚と産養―源氏物語創造―」(森一郎他編『源氏物語の展望 第四輯』三弥井書店、二〇〇八年)
- (5) 藤本勝義「女二の宮を娶る薫―「宿木」巻の連続する儀式の意義をめぐる―」(『源氏物語の表現と史実』笠間書院、二〇二二年、二〇〇五年初出)
- (6) 中嶋(4) 論文
- (7) 今井久代氏の「皇女の結婚―女三の宮降嫁の呼びさますも

の―」（『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』風間書房、二〇〇一年、一九八九年初出）において、三条天皇皇女禊子内親王の降嫁が検討された一〇一五年が初例と指摘されている。

- (8) 花宴・藤花宴の主な先行研究は以下の通り。清水好子「花の宴」（『源氏物語論』塙書房、一九六六年）、伊東慎吾「花宴・内宴考」（『風俗上よりみたる源氏物語描写時代の研究』風間書房、一九六八年）、山中裕「寛弘三年三月四日の『花宴』」（『平安朝文学の史的研究』吉川弘文館、一九七四年、一九六九年初出）、倉林正次「花宴」「藤花宴」（『饗宴の研究』文学篇）桜楓社、一九六九年）、橋本不美男「後宮曲宴と和歌」（『王朝和歌 資料と論考』笠間書院、一九九二年、一九七三年初出）、滝川幸司「花宴」（『天皇と文壇―平安前期の公的文学―』和泉書院、二〇〇七年、一九九七年初出）、浅尾広良「花宴と藤の宴―重層する歴史の想像力―」（日向一雅編『源氏物語 重層する歴史の諸相』竹林舎、二〇〇六年）など。花宴の変遷については、以上の論文を参考にした。

- (9) 滝川（8）論文
- (10) 橋本不美男氏が後宮で行われた藤花宴についてまとめている（橋本（8）論文）。以下、橋本氏の見解はこの論文による。また、史上の花宴（藤花宴・紅梅宴なども含む）については、

浅尾広良氏の年表を参考にした（『宮廷詩宴としての花宴―花宴卷「桜の宴」攷―』『源氏物語の皇統と論理』翰林書房、二〇一六年、二〇一三年初出）。掲出した藤花宴の他に、詞書に藤花宴の開催日時が残っている。『公忠朝臣集』に「延長八年三月廿日藤壺花に」という詞書があり（『公忠集全釈』風間書房、二〇〇六年）、醍醐朝廷長八年（930）に藤花宴が開催されたことが分かる。また、村上朝天曆四年（950）も藤花宴が行われたようで、『新古今和歌集』に「天曆四年三月十四日、ふちつばにわたらせ給ひて、花をしませたまひけるに」（春下・一六四・天曆御歌）という詞書が残る。

(11) 橋本（8）論文

和歌が公的な地位を獲得した場とする論は以下の通り。熊谷直春「古今集の撰集過程について」（『平安朝前期文学史の研究』桜楓社、一九九二年、一九六九年初出）、山口博「古今集の形成」（『王朝歌壇の研究 宇多醍醐朱雀朝篇』桜楓社、一九七三年）、橋本（8）論文、村瀬敏夫「古今集の撰進（2）飛香舎藤花宴」（『紀貫之伝の研究』桜楓社、一九八一年）。一方、滝川幸司氏は、この藤花宴の主な目的として時平が行った私的な献物にあったと論じ、〈公宴〉であったことに疑義を呈す（「延喜二年飛香舎藤花宴をめぐって」『天皇と文壇―平安前期の公的文学―』和泉書院、二〇〇七年、二

〇〇四年初出)。

- (13) 田中喜美春「古今和歌集の形成」(秋山虔編『王朝文学史』東京大学出版会、一九八四年)。古藤真平氏も同様に、穩子入内と女御宣下を藤花宴の政治的背景に見る(『共同研究報告』延喜二年三月の飛香舎藤花宴)、『日本研究』第四六集、二〇一二年)。
- (14) この時の事情は、島田とよ子氏「班子女王の穩子入内停止をめぐって」(『園田学園女子大学論文集』第三二号Ⅰ、一九九七年十二月)などに詳しい。
- (15) 河内祥輔「宇多「院政」論」(『古代政治史における天皇制の論理』吉川弘文館、一九八六年)
- (16) 穩子は弘徽殿を主な居所としていたが、度々遷御している。『眞信公記』承平二年(933)六月二十七日条に「中宮御膳供ニ進飛香舎」。親王達膳各弁備。」とあることから、承平年間には藤壺を使用していたことが分かる。穩子の居所については、東海林亜矢子氏の「母后の内裏居住と王権―平安時代前期・中期を中心に―」(『平安時代の后と王権』吉川弘文館、二〇一八年、二〇〇四年初出)を参考にした。
- (17) 角田文衛「太皇太后穩子」(『紫式部とその時代』角川書店、一九六六年)、藤木邦彦「藤原穩子とその時代」(『平安王朝の政治と制度』吉川弘文館、一九九一年、一九六四年初出)
- (18) 東海林(16)論文では、穩子以降藤壺が穩子の近親者によつて占有されたと指摘する。
- (19) 『古今著聞集』の「女御」について、橋本不美男氏は村上天皇の他の女御である藤原述子(藤原実頼の娘)は天曆元年に卒去、徽子女王(重明親王の娘)は女御宣下前であることから、藤原安子とする(橋本(8)論文)。その見解に従うべきであろう。
- (20) 栗山圭子「兼通政権の前提―外戚と後見―」(服藤早苗編『平安朝の女性と政治文化 宮廷・生活・ジェンダー』明石書店、二〇一七年)
- (21) 青島麻子「女二の宮の「降嫁」―今上帝の「婚取り」をめぐって―」(『源氏物語 虚構の婚姻』武蔵野書院、二〇一五年、二〇一二年初出)
- (22) 倉田(2)論文
- (23) 吉野誠「花の「宿木」巻―藤花宴へ、そこではないどこかへ―」(小山清文・袴田光康編『源氏物語の新研究―宇治十帖を考える』新典社、二〇〇九年)
- (24) 目崎徳衛「平安時代初期における奉獻―貴族文化成立論の一視覚として―」(『平安文化史論』桜楓社、一九六八年、一九六六年初出)

- (25) 細野はるみ「女二の宮の縁談」(秋山虔・木村正中・清水好子編『源氏物語の世界 第八集』有斐閣、一九七三年)、吉井美弥子「宿木巻の方法」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年、一九八五年初出)など。
- (26) 『河海抄』は、「梅か枝に麗景殿とあり相違おほつかなし」とする。
- (27) 栗本賀世子「宿木巻の藤壺女御―繰り返される藤壺―」(『平安朝物語の後宮空間―宇津保物語から源氏物語へ―』武蔵野書院、二〇一四年、二〇一二年初出)
- (28) 小嶋菜温子「女一宮物語のかなたへ―王権の残像―」(『源氏物語批評』有精堂、一九九五年、一九八一年初出)
- (29) 高木和子「按察使大納言」にみる方法意識」(『源氏物語の

思考』風間書房、二〇〇二年、二〇〇〇年初出)

*『源氏物語』本文の引用は新編日本古典文学全集、『古今著聞集』は集成、『新古今和歌集』『拾遺和歌集』は新編国歌大観に依った。ただし、私に表記を改めたところがある。『河海抄』は、『紫明抄・河海抄』(玉上琢弥編、角川書店、一九六八年)、『花鳥余情』は『源氏物語古注集成松永本花鳥余情』(伊井春樹編、桜楓社、一九七八年)、『貞信公記』は大日本古記録、『日本紀略』、『扶桑略記』は新訂増補国史大系、『西宮記』は故実叢書から引用した。なお、本稿は東京大学古代文学研究会(二〇二一年四月四日、Zoom開催)における口頭発表に基づく。席上ご教授頂いた先生方にお礼申し上げる。

